

令和4年度

## 第2回総合教育会議会議録

(開会 令和5年2月17日)

(閉会 令和5年2月17日)

岐阜県可児市教育委員会

令和5年2月17日午後1時30分開会

**出席者**

富田成輝君（市長）

小栗照代君（教育委員）

伊藤小百合君（教育委員）

渡辺勝彦君（事務局長）

佐野政紀君（学校教育課長）

堀部好彦君（教育長）

長井知子君（教育委員）

梶田知靖君（教育委員）

飯田晋司君（教育総務課長）

三宅愛彦君（教育研究所主任指導主事）

**教育委員会事務局職員**

木村彰伯君（教育総務課総務係長）

小池拓哉君（教育総務課総務係）

古川詩織君（教育総務課総務係）

## 開会宣言

- 市長（富田成輝君） 令和4年度第2回目の総合教育会議の開会を宣言。

## あいさつ

- 市長（富田成輝君） 本日は教育大綱を中心に委員の皆様が思うことの見解を伺いたい。まずは、事務局から教育大綱について説明を。
- 教育総務課長（飯田晋司君） 事前配布の資料に沿って説明をさせていただきます。資料1を御覧ください。

教育大綱と教育振興基本計画についての1番。教育大綱の法的根拠と位置づけです。

地方教育行政の組織及び運営に関する法律の規定により、地域の実情に応じて教育に関する総合的な施策を地方公共団体の長が定めるものとして位置づけられています。

3を御覧ください。

教育大綱と教育振興基本計画です。

文部科学省通知では、教育大綱は詳細な施策について策定することを求めているものではないこと、また対象期間は四、五年程度を想定とされています。

本市も平成28年の策定からおおむね4年で前回の改訂を行っており、今回改訂すれば前回から4年のタイミングとなります。

その下の黒丸のところをご覧ください。

可児市では、下記の1、2に基づいて教育大綱、教育振興基本計画を策定することになります。

①として、市の子育ての基本理念「マイナス10ヶ月から つなぐ まなぶ かかわる子育て」の下で、その主要な役割を担う義務教育を中心として、子育て全般における切れ目のない教育を推進していくために教育大綱を定めるとされています。

②として、市が目指す教育の基本的方向性を明らかにするとともに、教育大綱の実現に向けて各事業を計画的に推進するため、教育振興基本計画を策定することとなっております。

続いて、資料2をご覧ください。

現行の可児市教育大綱です。

前回、令和元年6月の改訂時には、目指す方向、この部分のうちの3か所が変更されていますので御紹介します。

1つ目に、冒頭、現行のものが「子どもの心に寄り添い」でスタートしております。改訂前は一番頭に日本一がついて、「日本一、子どもの心に寄り添い」となっております。2つ目、1行目から2行目にかけての「生涯にわたって学び」となっておりますが、改訂前は「可児市の未来に貢献できる」となっておりました。3つ目、最後のところの「育てます」の箇所が、改訂前は「育成します」となっておりました。

以上、3点が前回4年前の改訂で修正された部分です。

続きまして、資料3をご覧ください。

本市の教育大綱と教育振興基本計画の体系、関係性が分かりやすい概念図となっておりますので参考資料としてつけております。

次に、資料4をご覧ください。

前回、9月の総合教育会議の発言をまとめています。

主なものとして、丹羽委員からは、施設整備の成果と課題について。小栗委員からは小規模特認校の取組とコロナ感染の拡大による子供たちへの影響について。長井委員からは、岐阜市の草潤中学校の取組、不登校問題について。伊藤委員からは、ICTの推進の現状と課題について。堀部教育長からは、それらを総括して、また笑顔の学校、「笑顔の“もと”」の取組について発言がございました。

続きまして、資料5をお願いします。

「広報かに」1月号の特集記事、「“可”能性あふれる“児”のそだつまち可児」です。

対談冒頭の市長の発言の中ほど以降に市長の思いが込められた部分がありますので、参考資料としています。

続きまして、資料6をご覧ください。

教育大綱の教育振興基本計画への反映状況です。

大綱の5つの目標に対する振興基本計画の施策や具体的な手段を整理したもので、教育振興基本計画の中に掲載しております。

続きまして、資料7を御覧ください。

教育大綱の進捗状況をまとめたものでございます。

先ほどの資料6の大綱の教育振興基本計画への反映状況等を基に、今年度実施した令和3年度可児市教育委員会事務の点検評価報告書に掲載されている取組を抜粋しております。

大綱の5つの目標に対する具体的な施策の状況と課題について、一部の項目ではありますが、対照できるようになっております。

事務局からの資料の説明、以上です。

- **市長（富田成輝君）** 今説明があった4年前の教育大綱のときと現在の違い。不登校が非常に増えている。これはコロナの影響もあると思うが、この可児市においても不登校が増えているというのが、当時とは大きな違いかなというのが1つある。

もう一つは少子化。人口減少というのは最近特に脚光を浴びて、毎日のように新聞にも載っている。国が異次元の子育て支援と言って、各市町村でも選挙に向けて子育て支援の公約が多い。統一選挙に向けてもお隣の選挙区では、手を挙げている3人のうち一人は給食費を無償化する、もう一人は2人目から無償化すると言っているなど、はやりようになっている。

子育て支援については、今回とは別の機会に、また教育委員の皆さんやPTAの皆さんに話を伺いたいと思うが、この2点が特に前回とは大きく違ったところだと思う。

では、具体的なこれからの施策の根本になる教育大綱について、教育委員の皆様は順次、御意見を伺いたい。

- **教育委員（小栗照代君）** 大綱では共に生きるためのルールという記載がある。今、共に生きるのは大事だが、個を大事にするということも不登校などの対策に必要なのではないかと思う。

私の子育ての経験から、個人個人、一人一人を見ていきながら、やりたいことを見い

だし、目標を持たせてあげることが、不登校対策にとっても大切なことだと思う。

もう一つ、三重県の香肌小学校は児童が数人の小規模の小学校で、親子山村留学という取り組みをやっている。伸び伸びとした田舎で子供を育ててあげたい親が空き家を活用しながら、親子でそこに居住する。子供たちは伸び伸びとしたところで生活し、親はオンラインで仕事をするという活動である。

すると、地域の人も増えてくる。不登校の子に限らず、そういったところで生活をしていきたいという子供を伸ばすことができるというような事例で、何人か引っ越しをされた方もあると伺った。これをすぐにやるというのは難しいが、兼山小学校での小規模特認校制度もあるので、特別な学校で、個性的な子供を育てられるようなところにいずればはしていくというの、またいいのではないかなと思う。

- **市長（富田成輝君）** 兼山小学校は、前回のときも発言いただきましたけど、兼山に住む人たちの気持ちと、そういう学校へ行きたいという人たちの気持ちと、両方バランスを取るとするのはなかなか難しいと思う。
- **教育委員（小栗照代君）** はい。この事例では、三重県なので関東や名古屋から見学されたり、引っ越しをしている方もあると。
- **市長（富田成輝君）** なるほど。それは引っ越しすればそこへ住めるので、そういうアピールをするかどうかですね。
- **教育委員（小栗照代君）** はい。
- **市長（富田成輝君）** ただ、可児市では引っ越ししてくる人は多くあり、特別に推進するとなると数が多くなるため、難しいと思う。しかし今、小栗委員が言ったような、多様な価値観を日本国内にそれぞれの地域に合った価値観による、子育ての場所をつくって、それぞれ自分の価値観に合ったところに移住してということは、非常にいいこと。となると、可児市らしい価値観をどうつくっていくか。非常に人口の少ないところと同じことはできないので、可児市のようなところでどういう価値観をつくっていくか。その中に可児市独特の可児市教育という分野における価値観をどうつくっていくか。

可児市の独自の教育の価値観を表す言葉を大綱の中に記載するという事なので、その一つに今の個人個人、個を大切にするという表現をどういう形で入れるのか、入れる必要ないのかということについて議論いただくと。という御意見というふうに受け止めてよろしいか。

- **教育委員（小栗照代君）** はい。
- **市長（富田成輝君）** では、次へ。
- **教育委員（長井知子君）** 私が個人的に思うことと自分が子育てで気をつけてきたことは、心を育てていきたい、たくましくてしなやかな心をつくっていきたいということ。

昔はいじめがあるから学校に行けないといった理由だったと思うが、今はたくさん要因がある。たとえば、学校に行くのが面白くないとか、学校に行く意味が見いだせないとか、そういったことでも不登校になり得るという現状。その中で心を育てることでどんなことにでも打ち勝てると思う。マイナスの状況でも楽しみが見つけられる、そういう生き抜く力が育てられるので、心の教育は大事だと思う。私が三、四年前にPTA

をやっていたときに、先生方がおっしゃっていたのは、小学校でも英語や情報の授業が国から入ってきて、読み聞かせのようなやりたいことをやる時間が持たなくなってきていると。PTAでいいと思ったことを活動しようと思っても、その時間をつくることができないと三、四年前に言われていた。

そのため、大綱にもあるが、そういった心を育てるという時間を持つことが、今の時代、必要ではないかと思う。

あと、関市にあるNPOが不登校に対しての学校をつくるという活動しており、そこから派生して、今度川辺町にまた学校をつくと。

○ **市長（富田成輝君）** フリースクールかな。

○ **教育委員（長井知子君）** そういうのがあって、可児市の学校からも学校に行けない子がそういうところに行くことで学校の出席扱いになっている。今は生き方がいろいろあるので、子供たちも学校に行けないからそれが駄目ではなく、様々な生き方があるというのが分かれると心が潰れないのではないかと思う。

もう一つ、今の経済情勢とかを見ていると子供を持つのは怖いというニュースなどでも話題になることを長女と話をしました。また、長男は県外の大学に行っているのですが、行く前は外にすごく憧れがあったが、最近は岐阜のよさを感じる、岐阜に生まれたことを誇りに思うと言うようになった。

ふるさと教育というのは教育委員会でも大事にしているが、出ていったとしても、やっぱりふるさとへの思いはあるんだろうなあと子供を見て思った。以上です。

○ **市長（富田成輝君）** 心の教育とふるさと教育。私も自分の子供を見ていると価値観が違うと思う。

多分、私たちの頃と比べて、今の子供たちはたくさん情報が来ているため、当然価値観が変わる。価値観が多様化する。選択肢が広がっているのかなと思う。

ふるさと教育はおっしゃるとおりで、可児市に生まれ育ったよさを可児市にいる間に感じてもらう子もありがたいが、外へ出たときに改めて感じて、そして戻ってくるということはあるなと思う。自分が育った、両親が、そして近所の優しい人たちに囲まれて、学校へ行くときにはみんなが、近所のおじさん、おばさんが見守りをしてくれて、そういうことを思い出して、そういう環境で育てたいということは市の職員でも多い。一旦出ても、改めて可児のよさを思い返して戻ってくるというパターンがあっていい。そのため、育てているときにここがいいなあとという思いをどう育てていくかが大切だと思う。戻ってくるという選択をしてもらうような育て方と戻ってこられる環境。そこをどうつくっていくかというのがある。心の教育とふるさとの教育と。ありがとうございます。

では、次へ。

○ **教育委員（伊藤小百合君）** 先日、可児市で行われている幼保小の連携推進会議に出席した。そこで、県が推奨している幼保小の架け橋プログラムというのがあり、可児市は東明小学校が対象になってやっている。東明小学校では「笑顔の“もと”」である「すすんで なかまと おわりまで」というのを根っこにして教育方針としているが、コロナ禍のこの2年間、小学校と幼稚園・保育園など、周りの関係した組織の中で会議や授業参観を、何も行えなかった。今回、2年ぶりに授業参観などを市内の全部の小学校で行われたということで、今の「笑顔の“もと”」になる、その根っこ

の部分をつまんなが共有して、同じ方向で目指すものを持って、小学校の先生と会話ができる、大変有意義な時間を持つたという話を聞くことができた。2年やれなかったことによってブランクがあり、先生方も忙しい中ではあるが、継続的に子供を育てていくことについて、こういった時間を持つことはすごく必要だと校長先生が切に感じられたと聞き、なるほどというのを感じた。

やはり、今は一人一人、個に寄り添った支援というのが大変必要で、困り感を持っている子を周りの人たちがいろいろな機関、大勢の目で見ることによって、少しでも支援の手を差し伸べることが必要である。幼稚園・保育園だけではなく、小学校、こども課、ばあむ、くれよん、フレビアなど、市内にある全部の機関で共有し助け合っていく、子供の支援に寄り添っていくというのを継続していくことが、少しずつ子供の成長の助けになることにつながるのではないかと思う。

すぐ結果として出るわけではないと思うが、そういうものがいずれ長い目で見て、例えばそういうふうに出てきた家族がこういうところがよかったよとかいうのも伝わってほしいのかなと感じている。以上です。

○ **市長（富田成輝君）** 子育てに関係するいろんな機関、または直接関係しないけれども、いろんな市内の団体とか、そういうところがみんな連携して子供を育てるといことですね。

○ **教育委員（伊藤小百合君）** はい。

○ **市長（富田成輝君）** 分かりました。

○ **教育委員（梶田知靖君）** 私は可児町に生まれて、可児町の頃から可児に住みこれで50年……。

ふるさと可児への誇りということで、教育委員に任命されてから、11月に荒川豊蔵資料館へ伺った。本当にいいところだなと感じた。

可児市の子供たちは、このコロナであまり利用されていないと荒川豊蔵資料館も方はおっしゃっていたが、定期的にはお子さんたちがいらっしゃるとのこと。それこそふるさと学習につながるのかなと思う。昔からの歴史にどんどん関わっていくと本当にいいなと思う。

あと、箱物の話になるが、可児市は10万人都市で、立派な図書館があるといいなと思う。今の図書館、桜ヶ丘や帷子に分館があり、十分用は足していると思う。私の子どももa1aや、マーノで勉強しており、もっと子供たちの学習の場になるような大きな箱物であるといいなと思う。私からは以上です。

○ **市長（富田成輝君）** 図書館は本当に大事だと思いますし、今の可児市にある図書館がいいとは思っていない。

荒川豊蔵、そして図書館。これが大綱の中でどういうふうになるかは別として、特に荒川豊蔵はまさに日本の誇る歴史的な場所なので、そういうものが自分のまちにあるということ誇りに思ってもらえるといいと思う。

○ **教育長（堀部好彦君）** 私からは、まず現行の今の可児市教育大綱について感じていることを少し話したい。

私、可児市で校長として4年、教育長2年目、計6年、市長のお考え、理念に触れながら仕事をしている。この5つの目標、1、2、3、4、5、これは本当に今の学校は

ここに向かって、それぞれが特色ある教育活動を展開していると思っている。

資料6にもあるように、教育大綱と教育振興基本計画、見事にこれは対応しておりますし、教育振興基本計画の具体的な手段として記載のあることは、それぞれの学校で実践がされている。この資料6で示されていることをみると、この教育大綱は形骸化していないと感じている。

加えて、市長の普段の発言を振り返ると、この5つの目標の中の特に1番と4番と5番について強く市長の思いを感じている。

「豊かな心」を育みますという1番目ですが、これが3番の学力・体力というようなものよりも先に来ている。全国学調についての捉えも、数字で計れるような学力だけではなく、非認知能力のようなものにも目を向けていきたいという思いでいろいろ発言されていること、子供たちに語っておられたこと、すごく印象に残っている。

それから、4番の「ふるさとを愛し、社会に進んで貢献できる人」。これについても、特にふるさとを愛する、可児市を愛する子にしていきたいと。可児市から出ていく子もいるが、また戻ってきてほしいとか、外で暮らしていても可児市のことを思いながら暮らしてほしいとか、可児市を支えてくれる人材を育てたいとかいうようなことも、いろんなところで市長が語っている。

そして、5番目の「子どもは地域全体で育てる意識」を高めます。これについても、いじめ防止を筆頭に学校だけに任せない、学校を支えていくんだということで、市長部局としてリードいただいている。また、コカ・コーラ等の企業連携についても、私はこの5番に当たるのかと思う。

それから、今市長がおこなっている不登校の児童・生徒を抱える御家庭の保護者との懇談。そういったことも地域の力を活用して何とかならないか、ということで大変ありがたい。

そういった市長の姿勢が、この教育大綱が形骸化していないという状況をつくっているのではないかなと思う。

2つ目に、今後の新しい教育大綱をどうすべきなのか。市長が最初に言われた4年前との違い、これがキーワードとなってくると思う。

市長が、不登校のことを深刻になっている、本当に自立支援が必要な子供が増えているということを常々課題に出しておられることは大変ありがたいと思う。加えて、私がこの2年間、または校長のときに思っているこの4年間の違いですが、特別支援学級や通級指導教室に通う児童・生徒が増えている。それから、外国籍児童・生徒においては、国籍が多様化している。あと、散在、蘇南中校区に広がってきていると感じる。

また、その他では、希死念慮、自死。死にたいという希死念慮を抱えている児童・生徒も、これは本当にこの4年間で増えている。

これらをどういう言葉で、不登校をはじめ今のような子たちが増えているが、そういう子たちを一くくりにするような文言が、マイノリティーなんて言ってはいけないような気もするし、いい言葉が見つからないが、私はそういう子たちが増えているという実態を踏まえた文言というのが必要なのかなあと。

やるべきことは、私としてはこの5つの目標、先ほど言ったように形骸化しておりませんので、これは生かしていきたいと思っている。



では、新しい方向と言ったときに、市長の新春特集で語っておられることが全てというか、可児市の価値観という言葉が出ましたが、これが私は可児市の価値観だと感じている。

つまり、教育大綱の目指す方向、今2行で記載がある。子供の心に寄り添い云々と、こういう人材を育てますと書いてあるが、「“可”能性あふれる“児”のそだつまち可児」という文言を活用して、ここに位置づけるべきではないかなど。資料に書かれている市長のお考え、それを踏まえると、やっぱり先ほど言ったマイノリティーと言っているか分からないが、マイノリティーへのまなざしを感じる。

どの子も可能性あふれる子なんだよと。だから、今可能性が閉ざされている子たちに光を当てたいんだと。その中に不登校の子があり、希死念慮を抱える子があり、特別支援学級で学んでいる子がありと捉えて、この4年間増えてきている、子供たちの実態が特に変わってきている子たちに希望の光を当てるような、そんな目指す方向の文言があるといいかなど。「“可”能性あふれる“児”のそだつまち可児」を大きく位置づけながら、この文言をとというようなことを思う。

5つの目標の方向として、私はこの1、2、3、4、5はとってもいいなあと思うし、市長がずっと訴えてこられたことだと思う。学校はそれに従って、それぞれの学校で奮闘していると思っているので、その可能性が今塞がれているような子たちにより目を向けていこうではないかというようなメッセージを発信していくといいと思う。以上です。

○ **市長（富田成輝君）** ありがとうございます。

教育長がまとめてくれましたので、今の目指す方向のところ、そしてそれぞれ貴重な意見を委員からいただいたので、それをどういうふうに取り組んでいくか。5つと決まっているわけではないので、6つでも7つでもいいと思う。今回の貴重な御意見を基に、教育委員会事務局のほうでまた案をつくって、次の議論をお願いする。

それから、今の「“可”能性あふれる“児”のそだつまち」、これはほかの方から評価が高い。先日も他市町村長からお褒めの言葉を頂いた。

では、次第の1つ目は以上で、2つ目、そのほか何かございましたら。よろしいか。

〔挙手する者なし〕

ありがとうございました。

事務局へお返しします。

○ **事務局長（渡辺勝彦君）** ありがとうございました。

市長も今言われましたように、今日、貴重な意見をいろいろといただきましたので、それを参考に次回、事務局のほうで案をつくりまして、またお示しして御協議いただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

本日はどうもありがとうございました。

閉会 午後2時39分